

桑山正進著

『異相ガンダーラの仏教』

内記理

本書は、二〇二二年七月から順次刊行される著者の論文集『インドウークシユ南北歴史考古学叢致』全四巻のうちの、記念すべき第一冊目である。第Ⅰ巻には、ガンダーラの仏教に直接的にかかわる研究が集められる。

前世紀初頭に濱田耕作氏が西北インドのガンダーラ（広義でパキスタンとアフガニスタンの一部）における歴史・文化の研究の重要性を指摘し、その視点は教え子の一人である水野清一氏に引き継がれた。水野氏は一九五九年よりアフガニスタンおよびパキスタンでの現地調査を実現させたが、その第四次（一九六三年）の調査より隊員の一人として参加したのが本書の著者である。本論文集は、著者が発掘調査を含む現地調査で得た知見を踏まえて半世紀以上にも及ぶ期間にわたって執筆した論考を収めており、日本における西北インド及びその周辺の歴史・文化研究の現段階における到達点を示すものである。西北インドを主な舞台としつつも、著者の視野は南アジア・中央アジアはもちろんのこと、西方のヨーロッパ諸国や東方の中国、さらには日本にまで向けられ

ており、ユーラシアの歴史や文化を広くかつ深く学ぼうとする者は、本書を避けて通ることができない。

評者もまた、西北インドの歴史と文化の研究の重大さを認識する者の一人として、学生時代より著者の重厚な論文から多くを学んできた。評者にとっては師の師とも言える立場にある著者による著書の評価をするなど、自身の力量を越えたおこがましい行為であることを自覚しつつも、著者の一連の研究の価値を適切に次世代へつなぐこともまた、現在同地の歴史・文化を学ぶ自身に課せられた責務の一つと考え、ここに書評の執筆を試みた。

本書は以下の六部から構成され、計二〇点の論考を収める。

第Ⅰ部 ガンダーラをどうとらえるか

第Ⅱ部 仏寺の外相

第Ⅲ部 ガンダーラにおけるストゥーパ概念の転換

第Ⅳ部 漢文資料にあらわれたガンダーラ仏教

第Ⅴ部 ガンダーラから中央アジアへ

第Ⅵ部 大月氏からクシャーンへ

第Ⅰ部では、インドにおける辺境としてのガンダーラと同地の仏教の特性が、歴史と地理に基づき説明される。ガンダーラで仏像が現れた背景や、仏鉢や本生処が創出された理由は、同地がインド正境から外れた辺地であったことに求められる。インドにおける仏教信仰の展開や仏塔（ストゥーパ）についての基本的な著者の考えが示される。本来円形であった仏塔の平面形が同地で方形となり、階段が作り付けられ方向性を持つことになったが、この方向性の付与が正面性を持つ仏像の出現と大きくかわる。

第Ⅱ部では、タキシラとガンダーラにおける各期の仏寺の様相

や地域間の違いが整理された。タキシラで時代ごとに石積方法の違いがあることに基づき、各期における伽藍配置の傾向が示された。ダイアバー積の採用時期の検討結果からは、仏像の出現時期やクシャーン朝の王カニシユカの登位年も考察された。また、ハツダのタパ・シヨトル仏寺址の塔院の年代も、著者が発掘に従事したラルマ仏寺址の状況に基づき示された。

第Ⅲ部では、西北インドの仏塔に認められる方形の基台の出現に、ローマ帝政期の文化が影響した可能性が高いことが示された。また、シャー・ジー・キー・デリー仏寺址の仏塔の平面形の変遷過程が示された。そして、仏塔の車輪状構造は工法上の目的によるもので、帝政初期のローマから南東インドにもたらされたことを示した。さらに、スワート出土とされる個人蔵の青銅製仏塔および内部に作り付けられていた触地印の仏像が、西暦紀元後七世紀以降につくられた念持小祠堂と舍利容器の機能を併せ持つ資料であることが示された。

第Ⅳ部では、仏鉢が目撃された後五世紀前半頃の罽賓がガンダーラを指すこと、また、ミヒラクラによる破鉢伝説が中国で末法思想の拠り所として創出されたことが示された。仏僧ナレーンドラヤシヤスの検討を通じ、西北インドの仏教が六世紀中葉まで無事であり、五世紀後半から六世紀前半にかけておこなわれたと信じられてきたエフタルによる破仏などなかったこと、末法観の成立は中国内部の問題とすべきことを示した。そして、ウディヤーナについての記録の混乱状況と仏跡の地理的な配置の実際が、課題とともに示された。

第Ⅴ部では、ガンダーラの図像がクズル石窟の図像につながる

ものの、後者の年代が前者の年代より大きく下ることが示された。また、ガンダーラの土器を層位発掘の成果に基づいて時期区分し、各期におけるガンダーラと周辺地域の関係性を整理した。そして、西北インド出土の土偶について、層位発掘の成果に基づき、遅くともマウルヤ朝時代（紀元前三世紀）以降に存在し、小型のものがタキシラで紀元前後頃まで存続したことを示した。

第Ⅵ部では、漢文史料に基づき、クシャーン朝の王クジュラ・カドフィセス（以下「クジュラ」）の活動時期が示された。また、トハリスターンでのエフタルとテュルクの城邑が、それぞれバグラーン・ゴリー平原（テュルク勃興後）とカラ・イエ・ザールの遺跡にあったことを示した。なお、補記では吉田豊氏が漢文史料におけるいくつかの地名の音写語の原語を仮説として提示した。続いて、トハラー（トハリスターン）の指す範囲が歴史上どのように変化したかを確認した。本書の最終章では、中国の仏教の主な源流がガンダーラにあり、そこで仏鉢や四変処が捏造され仏教徒の巡礼の舞台となったこと、仏像や多仏の思想が生まれたこと、後六世紀半ばにガンダーラに代わってカーピシーやバーミヤーンが繁栄したことが説明され、続く第Ⅱ巻『新興バーミヤーンの時代』（二〇二三年）における議論へ橋渡しされた。

本論文集は、その第一冊目から重要な指摘に満ちあふれる。仏像の出現時期やカニシユカの活動時期といった、同地の研究における重要な問いに対する著者の見解が示される。カニシユカの活動時期についての著者の見解は、後に触れるように現在通説ととらえられているものと異なるが、本書ではこの論点以外でも通説を打破する議論が複数展開される。大月氏とクシャーンが同一

でなかった、大夏（バクトリア）の都がバルフでなかった、エフタルの破仏など存在しなかった、というように、学界で長く信じられてきた誤解が片端から打ち碎かれるため、読者は緊張感とある種の爽快感とともに本書を読み進めることになる。議論の射程はローマ帝国とのかかわりや中国における仏教の受け入れられ方などにまで及び、読む者はその視野の広さに圧倒されることであろう。

このような内容の充実した成果物として公刊された本書であるが、評者が本書を読み進める過程で今後の西北インドの歴史・文化の研究における課題となると考えた点を、以下にまとめる。

石積に基づく年代について

著者が西北インドでの仏教文化の変容を知るための年代の重要な指標としたのが、タキシラ地方における石積方法である。同地を発掘したJ. マーシャル氏以来、石積に変化があったことが知られるが、著者はそれを活用し、各期の仏寺の様相を整理した。

ただし、性格の異なる遺跡において遺構の石積と建設時期の関係を考えると年代の齟齬が現れるようであり、本書中にその思索の過程が垣間見える。一九七〇年代に初出の論文では、シルカッブ都市址とダルマラージカー仏寺址におけるカンジュール切石外装の遺構を同一時期とみなす一方で（四二、四六、一一二頁）、二〇〇三年初出の論文では、同じ切石外装の場合でも、ダルマラージカーのものがシルカッブのものよりも一足早く、シルカッブのものはダルマラージカーで次のダイアパー積で建築されたものと同時期とする（七八頁）。それは、七五頁で表に示されたよ

うに、両遺跡で切石外装の遺構から出土した貨幣の発行時期に違いがあるためである。

年代の手がかりの少ない同地の考古学を学んでいると、石積のような便利な指標には無条件で飛びつきたくなるが、同時期であっても遺跡の性格により建築に用いられる石積が異なる可能性があることを、本書は冷静に論じている。一方で、都市と寺院で同時期に仏塔を建築するに際し、工法を使い分けて用いることなどあるのか、またその理由は何なのかについては、今後考えるべき課題となる。著者はシルカッブがこの頃には都市としての機能を失い、ローカルな場所になっていたことを理由として説明する。しかし、都市としての機能が失われ、土地が寺院を建てるために再利用されたのだとしたら、近隣の寺院と同様の最新の工法を用いるのではないかと想像できる。また、立地による特例を認めると、石積の違いに基づく伽藍配置の変遷についての理解も揺れ動くのではないかと危惧を感じた。むしろ、出土貨幣の違いは過渡期を反映し、クジュラの治世の開始時には依然として切石外装が用いられていたが、同王治世のある時期にダイアパー積が採用された、という流れを想定した方が、諸々を矛盾なく説明できるのではないかと評者は考えた。二つの異なる指標の間で齟齬が認められる場合に、どのように考察を進めるべきかを考える上で重要な事例を示したものと言えよう。

カニシユカの年代について

石積の年代にかかわり、もう一点において著者の思索の過程を追うことのできる話題がある。こちらは漢文史料の分析が示す結

果との年代的な齟齬に基づくもので、インド全体の歴史に重大な影響を与えうる、カニシユカの活動時期についての論点である。なお、同王の登位年については長い研究史があり、後七八年や一二年、一四四年と考える説など複数の説があるが、今世紀初め頃から一二年説が広く支持される傾向にある。

石積と出土貨幣に基づきタキシラ地方の様相が考察された二〇〇三年時点では、遺構出土の貨幣と紀年銘資料に基づき、カニシユカの時代にはダイアパー積でなく次の工法の半切石積が用いられたこと、また、後期ダイアパー積（小さな地石を用いるダイアパー積）が後七〇年代にあてられることが示され、カニシユカ登位七八年説は受け入れがたいとされた（原論文一七頁）。しかしその後、二〇一七年初出の論文で漢文史料の検討に基づき王の曾祖父であるクジュラの没年が後一六〇二六年頃に見直されたことにより（三七八頁）、そこからその曾孫であるカニシユカの活動時期も大まかに推定できるようになった。一世紀以上時間の開く一二年などでは遅すぎ、半世紀後の七八年であれば時間の経過として自然である。前稿の主張が撤回され、カニシユカの治世が後期（小）ダイアパーの時期に遡ることがないと言い切れないとされた（三八六頁注一〇五）。

これは漢文史料の分析と建築工法の分析の間で認められた傾向の違いを説明しようとしたものである。学界でカニシユカ登位一二年説が揺るがない通説のように受け入れられる中で、少なくとも漢文史料の精査に基づけばそれが支持されないことを示したものであり、原論文の発行時には多くの研究者に衝撃を与えた。現在の研究の大勢がどこにあるとそれとは距離を置き、自身の

分析を貫き通すべきであるとする姿勢から評者が受けた影響は小さくない。少なくとも、著者による分析の手順は筋が通っており、その結果に基づく見解は軽々しく無視されるべきでない。

著者がクジュラの没年を後一六〇二六年頃と考える主な根拠は、『後漢書』に記された、大月氏のアムー河上流域到達（前一三六〇五年頃）の「百餘」年後に貴霜（クシャーン）翊侯の丘就却（クジュラ）が他の四翊侯を併せたとする内容である。著者は「百餘」年後を前一三六〇五年頃からちょうど一〇〇年経過した前三六〇五年頃と考えた。その年代は、敦煌懸泉置遺跡出土木簡のうち、翊侯号を記すものが前四三年（永光元年）と前三七年（建昭二年）のものであり、それ以後のものがないことによっても裏付けられるとする。クジュラの没年齢は『後漢書』に八〇余歳と記されるから、クシャーン朝創始時のクジュラの年齢を二〇歳から三〇歳と若く想定した場合、没年は後一六〇二六年頃になる（三七五〇三七八頁）。その後、子と孫の二代の治世を経て曾孫のカニシユカの治世に至る。その場合、カニシユカ登位七八年説が有力な候補となる。もしカニシユカ登位一二年説を主張しようとするならば、大月氏のアムー河到達からクシャーン朝創始までの間に、一〇〇年ではなく一五〇年の経過が必要である。

ここで気になるのが、「百餘」の「餘」が意味するところである。つまり、この語にどれほどの時間幅を与えることが許されるかである。評者は漢文史書を正確に読解し適切に分析する能力を持ったのだが、『後漢書』の中に類似の方法で年の経過の程度を示したものがなく、探索を試みた。すると、漢が建国されてからの経過年を「百餘」を用いて示す記述をいくつか認めた。まず、

左周黄列伝第五十一に「漢初至今三百餘載」という記述がある。これは後一二六年（永建初年）頃に左雄がなした上疏文の中に現れる（吉川二〇〇四・三九五、三九九頁）。前漢の高祖が漢王に即位したのは前二〇六年とされるから、三三一年後のことを「三百餘載」と表現していることになる。また、李杜列伝第五十三に「實以漢興以來三百餘年」とある。後一三三年（陽嘉二年）に発生した天災についての問いに対する李固の返答の中に現れる（吉川二〇〇四・五一二～五一三頁）。三三八年後のことを「三百餘年」と記したことになる。そして、唐代に付された注ではあるが、姚期王霸祭遵列伝第十の注に「漢興至此二百餘年」とある。これは後三三年（建武九年）の祭遵死去の記事にかかわる記載であるから（吉川二〇〇二・四九二～四九三頁）、二三八年後のことを「二百餘年」と表現したらしいことが分かる。これらの例は、「百餘」年ではなく「三（二）百餘」年であるという違いがあるが、三十八年程度までは「百」年に対する「餘」年の範囲内にあった可能性を示す。仮に「百餘」年後が一三八年後を意味した場合、クシャーンの独立は後三〇四年まで下り、クジュラの没年は後五三〇六三年頃まで下らせて良いことになる。すると、後一二七七年までの七〇年程の間に子と孫の二代の王が統治したという説明は不可能とまで言えなくなる。しかし、上記の後五三〇六三年はあくまでも、「百餘」年を類似的記載例に基づいて最大限膨らませ、また、長寿であったクジュラがクシャーン朝創始時に二〇〇三〇歳と比較的若かったと仮定した場合に成り立つものであり、蓋然性はそれほど高くない。やはりカニシユカ登位一二七七年説を積極的に支持するためには、大月氏のアムール河上流域到達からクシ

ヤーンの独立までの間には最低一五〇年の経過があつて欲しい。本書での漢文史料の分析結果はカニシユカ登位一二七七年説との親和性が低い、と言わざるを得ない。今後、各研究者が近年の潮流に乗りカニシユカ登位一二七七年説に基づいて議論を続けようとする場合には、この点を頭の片隅に置く必要がある。

仏像の出現について

仏像がいつどこで出現したかは、仏教史上で解決されるべき重要な課題の一つである。著者は、仏像がクジュラの時代のタキシラで登場したと考える（二二頁）。仏像の出現時期もまた、石積の検討に基づき説明された。やや横長の一室構成の祠堂が、ダルマラージカー寺院址においてクジュラの時期に登場したダイアパー積の建築で初めて現れる（八一～八二頁）。祠堂には仏塔を収めたものがあることが知られているが、ダイアパー積の時代において仏塔を収めた痕跡を持つ祠堂は二室構成を持つ。一室構成の祠堂に仏塔を容れた痕跡は乏しく、仏塔以外のなんらかの礼拝対象を安置したことが予想され、礼拝像こそが安置されるものとしてふさわしい。仏像自体の分析から直接その出現時期を考慮の得なく、建築遺構の形式から間接的に時期を考える手続きは説得的であり、遠回りに見えて実は最も堅実な方法である。

しかし、一室構成の祠堂に仏塔を容れた痕跡が乏しい一方で、仏像が祀られた痕跡が乏しいこともまた事実である。ダルマラージカー大塔周辺での仏像の出土例を確認すると、一室構成の祠堂B一三から二点のストゥッパ製仏頭が出土した（Marshall 1916: 13, Pl. Vb, VIc）。しかし、祠堂B一三は半切石積で建設されたも

のであり、ダイアバー積の時代に遡って一室構成の祠堂が礼拝像を安置するために使われたことを証明するものではない。その他にも、一室構成の祠堂B一二から粘土製男性頭部やストウツコ製菩薩頭部が出土したが(Marshall 1951: 266, Pl. 137a, 159g)、これもまた後期の石積で建設されたものである(四八頁図三「Marshall 1951: Pl. 45」)。

K. ベーレント氏は、礼拝像を祀る平面U字形の祠堂に対し、ダルマラージカー大塔を囲む一室構成の祠堂は平面C字形をしており、聖遺物を祀るためのものであったと主張する(Behrendt 2006: 90-91)。内部に方形の基壇を残す祠堂R五がその主張の有力な根拠となるが(Behrendt 2006: 102, fn 44)、R五もまた半切石積で造られる。つまり、大塔を囲む一室構成の祠堂には、仏頭が二点出土したものと基壇を残すものがあるが、それらはいずれも祠堂の最初期(ダイアバー積期)のものではない。

一室構成の祠堂にかかわる点以外にも、仏像の出現が方形基壇の出現と軌を一にして起こったとする主張が本書の各所にある(二二頁、三〇―三〇二頁)。ただし、これについても、初現期のダイアバー積による方形基壇を持つ仏塔の正面に仏像が貼り付けられたことが明確に分かる遺構の実例が存在するわけではない。今後、著者が示した見通しに沿って仏像の出現時期の検討を進めるためには、ダイアバー積による一室構成の祠堂や方形基壇の仏塔に仏像が置かれていた痕跡がないかを注意深く観察する姿勢が求められる。

仏像の出現時期とかかわり、シャー・ジー・キー・デリー仏寺址出土の銅製舍利容器の制作時期もまた、研究史上で大きな争点

となってきた。容器の身と蓋に、仏像が刻まれるためである。インドに存在した仏塔の中で最大規模を持つ同遺跡の大塔について、著者は一九世紀初頭の発掘調査報告の記載内容のみならず、報告から漏れた写真をも調べ上げ、細かな検証を経てその変遷の過程を明らかにした。その結果、クジュラの治世以後カニシユカの時代までの間に人為的な破壊を蒙った円形塔を覆うようにして、カニシユカの時代に方形塔が作られ、その際に鑄造された舍利容器が基部に収められたことが説明された(二七六頁)。銅製容器には摩滅が少なく伝世品とは考えがたいため、それはカニシユカの時代に作られ、収められた可能性が高い(二七七頁)。なお、年代は、方形塔の四隅に残る円形残壁が他の遺跡のカニシユカからヴァースデーヴァ(カニシユカの二代後の王)にかけて時代の遺構で認められることと、『洛陽伽藍記』宋雲行歴記事に、カニシユカが大塔を建造した際に四隅に大きな高樓を建てたとする記述があることを理由に示された(一六―一六二頁)。

ところが、近年の研究においてはそれに反する見解が示されている。E. エリントン氏は、二〇世紀初頭の報告の際に見落とされたが、容器には実はフヴィシユカ(カニシユカの次代の王)の銅貨が付随していたと主張する。発掘時に封泥と判断された資料が、当時の写真をよく見ると、実は王の銅貨であったとする(Errington and Falk 2002: 101-102)。それが事実ならば、容器が作られ仏塔に収められたのはフヴィシユカの時代かそれ以後ということになる。ところで、評者は容器がカニシユカの時代に作られたものである可能性が高いと考えており、著者の見解を支持する。容器に刻まれたカローシユティー文字の形態の組み合わせ

が、カニシユカの時代の特徴を示すためである（内記二〇二三…六頁）。発掘者が本主に銅貨を封泥と間違えたかどうかを含め、慎重な検討が必要である。

東西ユーラシアをつなぐ交通路について

ユーラシアの西と東が張蹇の西域派遣をきっかけにつながり、漢代の絹織物をローマにもたらす、一般に「シルクロード」などと呼び表される交易の道が開かれたことが広く知られる。しかし、その道は具体的にどこを通っていたのであろうか。その道順を正確に示したのは、実は国内外で本書が初めてかもしれない。

著者が示した道は東方より、タリム盆地西南部からパミールをわたりワツハーン回廊に出て、河川沿いに西へ向かい、途中で南へ折れヒンドウクシユ山脈内の峠を越えてチトラール、ガンダーラへと進み、インド方面へ下る。インドとローマの間は海路季節風をもってつながり、インド西海岸とエジプトやサウジアラビアにある三つの港湾（なお、うち一つは仏像の出土により近年俄に注目を集めるようになったベルニケーである。）が紅海湾口にあるイエメンのアデンを介してつながる（三六五―三六九頁等）。広大なユーラシア大陸を跨ぐ東西交流の最初期における具体的な道順が、考古学資料及び文献史料の検討に基づいて説明された意義は極めて大きい。

一方で、これは実は著者自身が常に気にかけてきたことのようにあるが、同時代のカーピシーの位置づけが課題として残る。ヒンドウクシユ山脈南麓のカーピシーの交通の要衝としての繁栄は後六世紀半ば以降のガンダーラの衰退と連動する、というのが

著者の主張であり（四三四頁）、カーピシーは上述のクシャーン期の主要経路上にない。ところが、カーピシーのベグラームにはクシャーン期に遡る重要な遺跡があることが知られている。空白期間の中に孤立するかのよう存在することの遺跡の再調査を、著者は幾度も試みたものの、実現しなかったようである（第Ⅱ巻 ii 〈iii頁〉）。本書の注で、『史記』大宛列伝が大夏の東南に身毒国（インダス河流域、つまりガンダーラ）があると記録するのに対し、『漢書』西域伝上が大夏の南に罽賓（カーピシー）があると記録することに触れられるが（三八四頁注七二）、この記述の変化からは、前漢の併行期頃にすでにカーピシーが存在感を持っていたかのような印象を受ける。西暦紀元前後頃のカーピシーがどのような状況にあったかを考えることもまた、次の世代に残された課題の一つである。

以上、未熟な評者がどれほど正確に研究の大家である著者の意図を読み取れているか不安があるが、読み進める中で評者が感じ取ったことを書き連ねた。本書および本論文集が国内外の（第Ⅳ巻は英文で出版される）多くの後出の研究者にとって重大な道標となることは間違いなく、東西ユーラシアを跨ぐ歴史研究を一層前進させていく原動力となることを、評者は疑わない。

参考文献

- Behrendt, K. 2006, *Relic Shrines of Gandhara: A Reinterpretation of the Archaeological Evidence*, in Brancaccio, P. and K. Behrendt eds. *Gandharan Buddhism: Archaeology, Art, Texts*, Vancouver/Toronto, pp. 83-103.

Errington, E. and H. Falk 2002. "Numismatic Evidence for Dating the
"Kaniska" Reliquary." *Silk Road Art and Archaeology* 8, pp. 101-
120.

Marshall, J. 1916. "Excavations at Taxila." *Annual Report 1912-13*,
Archaeological Survey of India, pp. 1-52.

Marshall, J. 1951. *Taxila*, 3 vols, Cambridge.

内記理 二〇二二 「カローシユティ文字の形態からみたガンダー
ラ彫刻の制作年代」『オリエント』六六、一、一―二三頁

吉川忠夫 二〇〇二 『後漢書』第三冊 列伝一 岩波書店

吉川忠夫 二〇〇四 『後漢書』第七冊 列伝五 岩波書店

(B5判 四七二頁 臨川書店 二〇二二年七月

一五〇〇円＋税)

(愛知県立大学日本文化学部准教授)